被災地に生きる

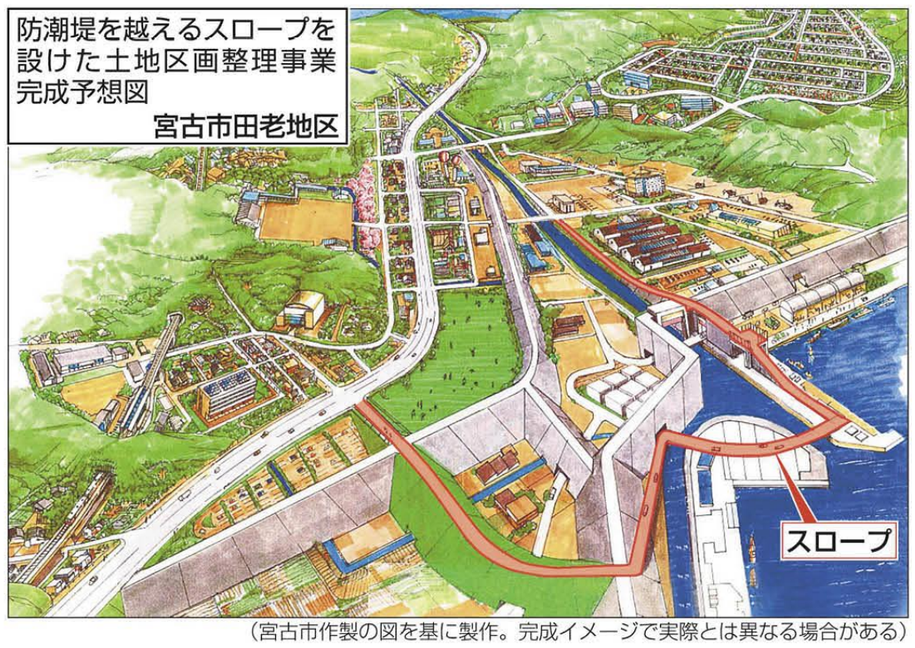
宮古・田老の今

幾たびの津波被害を乗り越えてきた「津波防災のまち」宮古市田老の復興まちづくりが徐々に具体化し始めた。二重防潮堤、高台移転地、市街地再生などが立体的に示され、完成予想図の看板も設置された。地域の復興をけん引するように、水産業には復活の兆しもみえる。養殖ワカメは震災から2度目の収穫期を迎え、浜には震災前の活気が戻ってきた。教育現場では、あの日の記憶の風化を防ぐ取り組みが始まっている。一方で、被災者の住宅、生活再建が遅々として進まぬ状況は変わらず、住民の思いは揺れる。

変わる防災のとりで

防潮堤にスロープ
迅速避難へ利用法模索

宮古市田老地区の復興のまちづくりでは、防潮堤を乗り越えるスロープが整備される。利用法が今後の検討課題となる



防潮堤を越えるスロープを設けた土地区画整理事業完成予想図
宮古市田老地区

（宮古市作製の図を基に製作。完成イメージで実際とは異なる場合がある）

宮古市田老地区の復興のまちづくりでは、震災前「防災のまち」の象徴でもあった二重防潮堤が変わる。「X型」の交わる中心部は分離され、1線堤は海抜14・7㍍の高さで海寄りに移設。山側の2線堤は平均70㌢かさ上げし、それらの防潮堤を乗り越えるスロープが2カ所に新設される。

スロープの設置は、まちづくり原案を考えた住民組織が提案した。水門閉鎖後、港付近にいる逃げ遅れた観光客らの迅速避難と、水門閉鎖に当たる消防団員の命を守ることが狙いだ。

東日本大震災で同地区では181人の尊い命が奪われた。そのうち、水門閉鎖や避難誘導に当たった消防団員は10人。消防団員には、人命救助のため住民や観光客全員の避難を待つか、自らの命守るために避難するか、難しい決断を迫られる。

グリーンピア三陸みやこの仮設住宅で暮らす市消防団本部付分団長の田中和七さん(58)は「水門を閉めた後もその外側にいる人が逃げられる。『見捨てたのではない』と団員が感じることができる」とスロープの意義を語る。

団員の安全にとっても、住民らの避難にとっても効果の大きいスロープ。設置が決まった今、利用法が次の検討課題となっている。

宮古市によると、平常時も水門を閉鎖し港への行き来をスロープだけにするか、津波襲来時に水門を閉鎖しスロープ利用をその際に限定するのか―の検討はこれからだという。

一方で、まちづくりの議論に積極的に参加する田老地域協議会長の林本卓男さん(66)はスロープに「反対はしない」とした上で、「大型バスが海岸部にいると避難に手間取るし渋滞も考えられる。冬場の路面がよくないときの上り下りは好ましくない」とスロープの問題点を指摘する。

犠牲者を出さないまちづくりは大前提だが、同地区では海をなりわいの場とする水産業従事者も多い。水門、スロープの利用方法については十分な議論が必要だ。

風化させない

田老一中 震災資料室開設へ

校舎が被災した田老一中は4月から同校視聴覚室に震災資料展示室「ボイジャー」を開設する。生徒が大人になっても津波を後世に伝え、東日本大震災の記憶を風化させないことが目的だ。

展示室には田老地区に関する新聞記事や全国から贈られた震災関連書籍、手紙や色紙など記念の品々が並ぶ。

震災直後の学校の様子に加え、運動会などの学校行事で生徒が生き生きと活動する数多くの写真も展示した。

佐々木力也校長は「明治、昭和の津波から立ち上がってきた歴史あるまちに田老一中はある。学校として、風化を阻止する義務がある」と展示室開設の経緯を説明。

名前の「ボイジャー」は、同名の合唱曲から取り、「子どもたちが、津波の記憶を胸に刻み船出する航海者となってほしい」との思いを込めた。

展示室は昼休みや放課後、住民にも開放する予定で、田老の津波史に、多くの人々が触れる機会も提供したい考えだ。

また、同校は震災2年を機に岩手大の協力で2011年度の在校生130人全員が執筆した津波体験作文集「いのち」も発行した。

「表現活動をしていかないと、震災は風化していく」と佐々木校長。津波を語り記すことで、記憶が薄れることを防ぎ、生きる力を育みたいという。

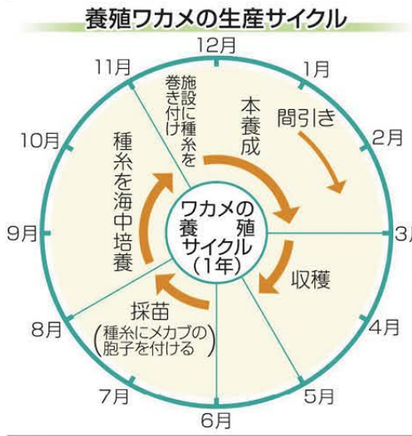
丸山恭生(みつき)さん（2年）は「田老に住んでいる限り津波を忘れない」ときっぱり。「幼いころから津波のビデオを見ている。逃げることが大事」と話す安田ひかるさん（同）は作文集で「この東日本大震災を一生忘れず、私に子どもができたら、この経験を伝えたいと思う」とつづった。

津波体験を後世に語り継ぐことは、再び惨劇を生み出さないための大きな力になる。

新聞記事や写真が並ぶ田老一中の震災資料展示室「ボイジャー」。教育現場から震災の風化を防ぐ取り組みが始まった

活気戻るワカメ養殖

加工施設復旧は道半ば



早朝の田老漁港に、養殖漁家の活気がよみがえってきた。

「真崎わかめ」のブランドで全国に知られるワカメの収穫作業が本格化。連日、港は水揚げに精を出す漁業者の姿であふれている。

田沢一男さん(63)もその一人。「だいたい復旧したようなもんだ」と生き生きと作業を続ける。

養殖施設624台が全滅した田老町漁協（小林昭栄組合長）。2011年11月までに再開を希望した養殖組合員68世帯（新規参入2世帯含む）の439台を復旧。共同経営方式から、震災前と同じ個人経営に戻った今季はさらに7台増えた。

現在、収穫しているのは12年11月中旬から養殖ロープに種糸を巻き付けたワカメ。巻き付けが例年に比べ遅れ、生育は遅れ気味だが、田沢さんは「どんな形でも施設を復旧できたのがよかった。これが商売なんだもの。1年遅れたら大変だった」と語る。

同漁協は4月15日までの1カ月間で1600㌧の収穫を見込む。養殖台数や漁家の減少で震災前の収量2千～2200㌧には及ばないが、昨季より300㌧増える見通しだ。

「震災前の雰囲気になってきた」。田老魚市場を管理する同漁協の大沢正美業務課長は、活気づく浜に復興の兆しを実感。

一方で、被災した2カ所のボイル加工場のうち復旧済みは1カ所で漁港のかさ上げ工事も途中の段階。道半ばの「完全復活」に、大沢課長は「少しずつ復興」と気を引き締める。

早朝に収穫した養殖ワカメの水揚げ作業に励む漁業者。浜に震災前の姿が戻ってきた

高橋さん（理容店経営）わが町を語る

予想図、早期実現を

人口流出に募る危機感

「立体的な完成予想図ができて、まちづくりの方向性が若干見えてきた」と話す高橋優さん（右）

「建物の基礎が撤去され、公共施設の残骸がなくなってきた。でも復興という形はまだ全然見えない」。宮古市田老総合事務所近くで仮設理容店「タカハシ」を営む高橋優さん(62)は言い切る。

「職員不足は理解しているが、法律に縛られず特例措置で復興をスピーディーに進める方法があっていいんじゃないか」と用地手続きなどの簡略化を高橋さんは訴え続けている。

その思いの根底にあるのが震災2年が経過する前に顕在化した仮設住宅の人口流出。「まだまだ田老から人がいなくなる」との懸念を肌で感じる。

高橋さん自身の思いも揺れる。選択肢は三つ。高台の集団移転地に住むか、宮古市街地に住むか、市外か…。「妻と相談して方向性を決めなければならないが、決断しかねている」と言う。

「年数とカネ」。二つの課題がつきまとう。集団移転地に自宅を再建できるのは2015年度から。「70歳になってからではどうにもならない。新しい生活への期待と不安が入り交じっている」というのが本音だ。

田老一中近くの国道45号沿いに今月、田老まちづくりの完成予想図が設置された。「当初から意見していた立体的な予想図。震災から2年たって、方向性は若干見えてきた」と明るい兆しもある。

だが、手放しには喜べない。「これからどの程度スピードが増すのか想像がつかない。絵に描いた餅じゃ駄目だ」と高橋さん。予想図の早期実現を願う。

積極的な住民意見必要

東日本大震災から3度目の春を迎えた。被災地に生きる住民と共に歩み紙面展開した「田老の1年」。それだけに今春の養殖ワカメの水揚げ風景には感動した。

その半面、最近、気になることがある。復興まちづくり住民説明会で、住民の質問、意見が震災当初と比べ極端に減った。時にはゼロということさえある。

「言っても無駄」「縦割り行政だから明確な答えが返ってこない」との声もある。しかし、まちづくりの主役は住民。行政と直接議論を交わす機会は多くないだけに積極的に意見をぶつけてほしい。

宮古市は、まちづくり原案の作成を住民の手に委ねた。「災害で二度と泣くことのないまち」「将来的に全戸高台移転を基本としたまちづくりを進める」など計画案に盛り込まれた意見、理念の具現化が求められる。

多くの被災者の住宅再建はこれからだ。復興の二文字が意味する「これまで以上に魅力あるまちづくり」とは何か。官民一体で知恵を絞り、田老の未来をつくってほしい。

（宮古支局・小野寺卓朗）

◇「被災地に生きる　宮古・田老の今」は今回で終わります。

～被災者からのメッセージ～

津波てんでんこ

題字・山下文男さん

逃げることを基本に

宮古市田老字館が森
林本食品店経営
林本　ソノさん(74)

復興のまちづくり事業で立ち退きの可能性があるので、津波を受けた店舗兼住宅の住宅部分は直していない。早く計画を決めてもらいたい。まちづくりを待って家を再建できるようになっても、人がいなくなってしまっては街じゃない。また被災住宅地をかさ上げするにしても、しないにしても津波では逃げることが基本だと思う。

明るいまちになって

宮古市田老のグリーンピア三陸みやこ仮設住宅
大下　海輝君
（田老一中3年）

震災前はどうしてボランティアが必要なのかと思っていたけれど、災害に遭ってその大切さが分かった。自分も支援物資の運搬を手伝った。震災を機にいろいろ考え方が変わった。高校は宮古北高に進学する。生徒会執行部に立候補して文化祭の企画などをやってみたい。田老が明るいまちになってほしい。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。